
結婚しようよ

トトトトトトト……

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

結婚しようよ

【Nコード】

N1258G

【作者名】

トトトトトトト……

【あらすじ】

「結婚しよう」「嫌です」校庭の隅に咲いてある桜の木の下でそのふたりは出会った。……て書くとロマンチックにならないかい（なりません）。積極的すぎるほど求婚してくる先輩と冷静に顔色ひとつ変えず断る後輩の学園青春ほのぼの爆走小説です。※注この小説はほぼ会話文で構成されております。

第一話 「結婚しよう」 (前書き)

※注この小説はほぼ会話文で構成されております。

謝罪・一度消してしまいました。申し訳ありません。こちらが本編となりますのでよろしくお願いします。

第一話 「結婚しよう」

登場人物

エイジ ／ 高校二年生

カナ ／ 高校一年生

「……はじめまして」

「……はじめまして」

「突然で申し訳ない。初対面の人。しかし聞いてくれ」

「なんででしょうか」

「結婚しよう」

「はあ？」

「いや、なんというか一目惚れだ。結婚しよう」

「嫌です」

「……そうか」

「あの。初対面で失礼なのですが、変わった所にお住まいなんですね」

「初対面で失礼だが、君にはこれが住んでいるように見えるのか？」

「まさか。あたしには校庭の隅にある桜の木の下に宙づりにされている馬鹿にしか見えません」

「……君、可愛い顔してなかなか口悪いね。一年生？」

「なんですか。ナンパですか。止めてください。あたし、そんな軽い女じゃないですよ」

「いや。一応歳の確認をね。俺、これでも二年生なんだ」

「なかなかマヌケな姿で笑えますよ。先輩」

「だったら笑えよ。後輩。……ところで、ひとつ頼みをきいてくれないか？」

「なんですか」

「見りゃ分かるだろ。結婚してくれ」

「嫌です。というか見ても聞いても分かりません」

「すまん。本当のことを言えば助けてくれ。もう結構な時間宙づりにされてるんだ」

「へえ。それはまたどうして」

「あれ。言葉が通じてないな。俺助けてほしいんだけど」

「まあまあ。どうせなら、もう少しお話ししようよ。哀れで間抜けな先輩」

「ドSだ。この後輩完全にドSだ。てか、さり気なく哀れってつけんな」

20分前……

『ふーむ。入学したてで緊張している後輩に愉快なプレゼントをしてやるか』

『えーと、ここをこうして。桜の木の下に立つと宙づりになるよう……』

『……よし。これで完成だ。愚かで哀れで間抜けな後輩の姿が目に浮かぶぜ。フハハハ』

完成 ↓ 木の上からジャンプ ↓ 着地 ↓ 設置場所 ↓
トラップ発動

『うわーーーーー』』

「……というわけだ」

「完全に自業自得じゃないですか。自分で仕掛けた罠に引っ掛かるなんて、本当に愚かで哀れで間抜けな先輩ですね」

「あっ！ ばか。写メを撮るな！ いやああああ！ 止めてええええ！ お嫁にいけないいいいいいい！」

「写真のタイトルは『ミイラ取りがミイラ』で決定ですね」

「……………き、気は済んだか」

「そこそここですかね。では。あたしは帰りますので。……あ、そうだ。先輩」

「ん？」

「自己紹介まだでしたね。あたしは一年一組のカナです。カナと呼んでくれて構いませんよ」

「俺は二年四組のエイジだ。呼び方は好きにしてくれ」

「はい。では。先輩。また明日」

「ああ。またな。後輩……じゃなかった。カナ。結婚しよう」

「嫌です」

初対面でもふたりは仲良し♪

「エイジ……といいましたか。あの先輩。初対面のくせにいきなり求婚とはいいい度胸です。しかし、どこかで会ったような……」

「……………なかなか愉快的な後輩だったな。こりや今年も楽しみなってきた——ってそうじゃねえええええええええええ！ あいつごく普通に俺のこと見捨てていきやがった！ ドＳだ！ あいつは完全なるドＳだあああああ！」

第一話 「結婚しよう」 終わり

第一話 「結婚しよう」 (後書き)

ほぼ会話文の小説なので頭の中でキャラクターを動かしつつ話を進めていただけると嬉しいですよ。

第二話 「兄の小遣いが400円ほど減ったのと同じことです」 (前書き)

※注この小説はほぼ会話文で構成されております。

第二話 「兄の小遣いが400円ほど減ったのと同じことです」

登場人物

エイジ ／ 男

カナ ／ 女

「おっす。カナ」

「あ、先輩。おはようございます」

「うお。超爽やかな笑顔。とても昨日俺を木に吊るしたまま帰ったとは思えないほどの爽やかさだ」

「なんだ。まだそんなことを気にしているんですか。案外器がちっさいですね」

「俺死にかけたんですが」

「あはは。そんなことはあたしの人生において大事ではありません。言ってしまうえば、兄の小遣いが400円ほど減ったのと同じことで

す」

「俺の命は400円分の価値しかないのかよ!？」

「兄の小遣いが400円ほど減ったのと同じことです」

「なんで二回言った」

「まあまあ。ところで今日はなんのご用事ですか？」

「ん。そうだな。……カナ。結婚しよう」

「嫌です。帰ってください」

「痛っ！ あっバカ！ 塩を投げるな塩を！ てか、どこから出したんだその塩は！」

「昨日となんにも変わってないじゃないですか。そんなに、あたしを怒らせたいんですかね。この馬鹿は」

「今馬鹿って言ったな！ 馬鹿って言った方が実は馬鹿なんだぞ——ってアイタタタ！ 塩を投げる力（略して塩力）が強くなった！ 案外プライド高い！」

「もう本当に帰ってくれませんかね」

「だったら溜息つきながら嬉々とした顔で塩を投げるな！ とりあえず、そこに置きなさい」

「……大体、先輩はあたしに一目惚れとか言っていましたけど、そ

れってただ単に顔で選んだってことでしょう。気持ち悪い」

「気持ち悪いって言うな。全国の一目惚れで付き合ったカップルに謝れ」

「少なくとも、あたしは顔だけで惚れられても困ります。まあ、顔は恋人を決める重要な要因のひとつであることは否定しませんが」

「じゃあ、これからの長い学校生活の中でカナのことを知ってけばチャンスはあるのか？」

「たかが残り一年二年の学校生活で、あたしのなにを知るっていうんですか。調子に乗らないでください。気持ち悪い」

「どうすればええっちゅうんじゃあああああ!!!!」

「あはは……ウソですよ。先輩。あたしはそんなにお高くとまれるような女ではないですよ。顔で惚れられるのは困るというだけです。先輩は嫌いなタイプではないので、これからの付き合いの中で考えが変わるかもしれません」

「本当かカナ。結婚しよう!!!!」

「嫌です。なんも分かってないじゃないですか」

「イテテテテ!!!! だから塩を投げるのは止めろってばああああ……」

塩を投げられてもふたりは仲良し。

第二話 「兄の小遣いが400円ほど減ったのと同じことです」
終わり

第二話 「兄の小遣いが400円ほど減ったのと同じことです」 (後書き)

楽しんでもらえましたでしょうか。

とりあえず、これからもちよこちよこ更新していきたいと思います。

第三話 「エイジ。逃げた方がいいぜよ」 (前書き)

※この小説はほぼ会話文にて構成されております。

第三話 「エイジ。逃げた方がいいぜよ」

登場人物

エイジ ／ 出席番号12番

カナ ／ 出席番号17番

「うっす。カナ」

「あ、おはようございます。先輩。朝早いですね。まだ、八時前ですよ」

「あー、俺は今日委員の当番だからな。月一くらいで早起きしないと」

「へえ。先輩って何委員なんですか？」

「図書委員だけど」

「……………すいません。よく聞こえなかったので、もう一度お願いできますか？」

「いや、だから図書委員」

「ウソですね」

「決めつけやがった!？」

「先輩。図書委員ってなにするのか分かってますか？ 本読むんですよ。缶けりやドッジボールはできないんですよ」

「俺、小学生？」

「……あ、もしかして先輩の中では、缶けりやドッジボールやけん玉をすることを『図書委員』というんですか？」

「違うし！ なにその色んな意味で悲しそうな設定！ 俺だって本くらい読むよ」

「缶けりのルールブックとかですか？ それとも、けん玉のテクニックスク全集？」

「いい加減、その小学生の設定から離れろおおおお！」

「……ということは、せせせせせせ先輩はホントに図書委員なんですか？」

「真剣に動揺しすぎな点が腹立つが、まあそうだな」

「あたし。もう図書室行くのは止めますね。カウンターで本読みながら、本の貸し出しをしている先輩を見ちゃった日には、貧血と眩暈と吐き気を催しそうなんで」

「催しすぎだよお前。せめて、どれかひとつにしてくれ。まだ納得ができるから」

「世界の……終わりです」

「やかましいわっ！ ……あれ？ 全く疑問に思っていなかったんだか、カナはなんでこんな朝早くに学校にいるんだ？」

「あー、それはですね」

「――はっ！？ ま、まさかカナ。俺を待っていてくれたのか！」

「はあ？ そんなわけ……いえ、そうかもしれません。あたしは先輩と会う運命に導かれて朝早く家を出て学校に来たんですよ」

「……………」

「……………」

「……カナ。熱でもあるのか？」

「あなた。自分から言っておいてなんて言い草ですか」

「いや、今なんか俺の本能が『エイジ。逃げた方がいいぜよ』となぜか土佐弁で叫ぶんだが」

「酷い……せっかく、早起きしてお弁当も作ったのに。あたし悲しいです」

「す、すまん。カナ。悪気はなかったんだ。でも、そんなに俺のことを……」

「いいえ。いいんです。先輩と会えて良かった」

「カナ——ありがとう」

「先輩……どういたしまして。じゃあ、ここにサインお願いしますね」

「ああ。分かった………ん？」

「一昨日、桜の木の下に罌を仕掛けたので反省文です。今日の放課後までに、職員室に提出しに行ってください。なんなら付き添いに行きますので」

「……………(汗)」

「先輩。あたし風紀委員なんですよ。昨日委員に選ばれて」

「……………(滝汗)」

「いやー、就任早々こんな手柄を挙げられるなんて思っていないませんでしたよ。あ、ちなみにお弁当作りましたけど、これ自分のお弁当なんで」

「……………」

「……………?」

「……カナのバツキャロー！ でも好きだ！ 結婚してくれええええええ！」

「嫌です。……あ、泣きながらもの凄い勢いで走っていった。先輩、くれぐれも反省文忘れないでくださいね」

騙されてもふたりは仲良し。

第三話 「エイジ。逃げた方がいいぜよ」 終わり

第三話 「エイジ。逃げた方がいいぜよ」 (後書き)

というわけで第三話でした。楽しんでいただけたなら幸いです。

第四話 「だってゴリラに激似だから」 (前書き)

※この小説はほぼ会話文にて構成されております。

第四話 「だってゴリラに激似だから」

登場人物

エイジ ／ 図書委員

カナ ／ 風紀委員

「桜の花が舞っている……もう、そろそろ散ってしまう時期になってしまったんですね」

サツサツサツ

「やはりあたしは桜が散っていくより、満開で咲いている方が好きですね。散っていく姿は、どこか悲しいですから」

サツサツサツ

「……で？ なにをやっているんですか先輩。ほうきとチリトリ持って」

「なんだよ。野球やっているように見えるか？」

「あなたならやりかねないのが怖いところですが――まあ、今回は掃除をしているように見えますね」

「そう。掃除だ。俺はこれまでとは心機一転。真面目に心を入れ替えることにしたのだ」

「心機一転とか言うわりに、やっていることがごく普通の掃除とは……一年生の頃がどんな感じだったのか想像するのが怖いです」

「黙らっしゃい。それに、ここの掃除をすれば、前回桜の木の下に仕掛けた罠事件の反省文を書かなくていいっていうからさ」

「完璧にそれが目的じゃないですか」

「まあな。あの後、なんやかんやで二枚だった反省文が四十八枚まで増加してしまったからな。さすがにやってられん」

「ある意味すごいです先輩……でも、いいんですか？」

「なにが？」

「ここの掃除って多分終わりませんよ」

「はあ？」

「だって、ここの掃除って桜並木の掃除でしょ。見てください」

桜並木（桜の木大群） ↓ 大量に舞う桜の花びら ↓ 掃除す

る ↓ 掃除している最中も舞い散る花卉 ↓ 掃除終わった所に
積る花卉 ↓ 掃除 ↓ o r z

「なんじゃこりゃあああああ!？」

「まあ、これを言いつけた人は皮肉のつもりだったのでしようね。
もしくは『そこで哀れな豚のように春が終わるまで掃除している
という意味だった説』もありますが」

「ちくしょおおおお。なんか反省文から救ってくれるわりには、
ニタニタ顔だったのが気になってはいたが……」

「その時点で気付きましたようよ。どの先生なんですか？」

「姫崎」

「あー、あの化学担当の。でも、あの先生美人じゃないですか。う
ちのクラスにも何人かいますよ。姫崎先生狙っている人」

「興味なし。俺カナ好きだし」

「えっ、先輩。田村好きなんですか？」

「違ええええええええええよっ!? てか、田村って一年の男性体育教
官じゃねえか! 知ってるんだぞ。一年生の間で『ウッホ』って呼
ばれてるの!」

「だってゴリラに激似だから」

「それを俺の好きなやつに当てはめるな。てか、お前は出会って四日間。俺から何を聞いていたんだよ」

「え……………戯言？」

「俺の告白は戯言ですか!？」

「はいはい。分かりましたから、さっさと掃除なり反省文なり済ませましょうよ。あたしも手伝いますんで」

「え、マジ？ 手伝ってくれるの？」

「ま、今日はちょっと嬉しいことがあったんで特別ですかね」

「おやつがプリンだったのか？」

「真面目な顔して何を言っているんですか？ ブツとぼしますよ。ふざけたことばかり言っていると、あたしは即帰りますからね」

「ああ。ありがとう。カナ…………結婚しよう」

「嫌です」

「あああああ!？ カナが競歩選手もビックリの速度で帰っている。待ってえ待ってくださいいいい! 置いてかないでー!!」

「…………まったく」

桜が舞ってもふたりは仲良し。

第四話

「だってゴリラに激似だから」

(後書き)

第五話 「俺に近づくと焼け死ぬぜ」

登場人物

エイジ ／ 二年四組 出席番号13

トシヤ ／ 二年四組 出席番号16

「ふー、いい天気だよな。たまにはこうやって授業をさぼって、屋上で昼寝するのもいい感じだよ」

「そうだな」

「そういや、エイジ。昼はどうする？ 今日、オレは学食で食べるけど、一緒に来るか？」

「そうだな」

「あそこの食堂安いから便利だよ。昼は恐ろしく混むけど」

「そうだな。……ところでさ。ひとつ聞いていいか」

「ん。何だよ？」

「お前、誰だっけ？」

「うおおおおおおおおおい！？」

「確かナオ……ナオなんとか。ナオタニ？」

「全っ然違えよ！ てか響きが完全に名字じゃん！ トシヤだよトシヤ！ 二年四組出席番号16番。クラスメイトでお前の後ろの席。そして、一年の時から付き合っているトシヤだよ！ てか普段から名前で呼んでいるだろうが！」

「分かってるよ。ちょっと初めて見ている人のために説明してもらっただけだ」

「……なに言ってるんだ？」

「安心しろ。こっちの話だ。で、なんでお前がここにいる？ この物語は俺とある少女の甘くて切ない青春恋物語（100%ウソ）を描いたものだったはずだ」

「オレにはお前がなにを言っているか全然分からない……というか、話があるって誘ったのはエイジじゃないか」

「ああ。そうだったな。アマガサキ」

「トシヤだっつーの。てか、せめて文字数くらいは揃えろ」

「実は……好きな女ができたんだ」

「止めてええええええ！ 止めてくださあぁあぁあいつ！ もういつそ殺してええええええ！」

「まあ、その話はいいや。それで……今回の相談というのはその女の子のことだ」

「と、いいますと？」

「……正直俺は彼女が好きすぎて、一目惚れのうえ初日から求婚しているんだが」

「早っ！？ 展開が早すぎるよお前！」

「ただ、彼女の方はそうでもないらしく、はっきりした答えは返ってきていない。俺は……俺はどうすればいいんだろうか」

「ふーん。お前にしては珍しく迷ってたんだな。それで、その子はなんて言ってたんだ？ 求婚したんだろ」

「嫌われてはいないと思う。いつも『嫌です』って言われるけどな」

「……めっちゃくちははっきりした答えが返ってきてるように思えるのはオレだけかな」

「うるせ。あれは彼女なりの親愛の証なんだよ。今は無理だけど、いずれは結婚しようねってことを伝えようとしているだけだ。今そう俺が決めた」

「あっそ。——だったら、それでいいじゃん」

「あん？」

「どうせ、お前のことだ。初めからオレの意見なんか聞きやしない
と思ってたよ。それに……オレの親友は女の子に嫌われるようなこ
とはしねえよ」

「トシヤ」

「まあ、エイジの好きなようにやってみな。オレが言えるのはそれ
だけだよ」

「……………」

「……………」

「さすがに手から炎が出るやつは言うことが違うな」

「うおおおおおおい！？　せつかくオレめっちゃ良いこと言
ったのに！　後、念のため言っておくけど出ないからね！　炎は決
して出ないからね！」

「ありがとう」

「あ？　なんか言ったか？」

「なんでもねーよ」

「あ、エイジ。これだけは言っておく」

「なに？」

「もし女の子に嫌がるようなことをして、万が一に絶交とかされてもストーリーカーになるんじゃないぞ」

「他の誰に言われてもいいが、絶対お前にだけは言われたくねえ。ルルちゃんがUFOから卒業しても『俺に近づくと火傷&感電死するぜ』って言い張ってたトシヤ君」

「ななななななな、なんでそれをー!？」

「てか、さりげなく電撃打てる設定つけるな」

「どいつだ! どいつがバラしんだー!」

「さーて、クラス中に噂を流してきましたようかね。第六話のサブタイトルは『電気ウナギも真っ青の能力者ですね』で決まりだ」

「止めてえええええええ!？ それだけはかんべんしてくださいあああああ
あああ! ……てか第六話とかサブタイトルって何ーってあああ
!？ エイジがとてもいい笑顔で去ってってしまうううううう」

第五話

「俺に近づくと焼け死ぬぜ」

終わり

第五話 「俺に近づくと焼け死ぬぜ」 (後書き)

えらい間が空いてしまったorz

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1258g/>

結婚しようよ

2010年10月22日10時14分発行